

蛰居中も天下国家を

論じた横井小楠

（土道忘却事件とその後の生き方）



横井小楠肖像
(福井市立郷土歴史博物館蔵)

幕 末明治の福井の先人、由利公正が師と仰いだ熊本藩士、横井小楠。小楠が一時期政治生命を絶たれた大事件が「土道忘却事件」です。

文久2（1862）年12月19日夜、福井藩政治顧問の小楠が、熊本藩江戸留守居役吉田平之助の別邸（現在の東京都中央区）において、肥後勤王党の刺客に襲われました。小楠は大小の両刀を備えておらず、約1キロ離れた福井藩邸まで刀を取りに戻ります。しかし、小楠が戻った時には既に刺客の姿はなく、吉田は重

傷を負っていました（2か月後、吉田はこの怪我が元で死亡）。熊本藩では、小楠が敵前逃亡し、土道を忘却したと憤り、福井藩に身柄の引き渡しを要求しました。



松平春嶽肖像
(福井市立郷土歴史博物館蔵)

す。しかし、その後起きた福井藩の挙藩上洛計画の失敗により、文久3（1863）年8月、小楠が熊本に戻ると、あらためて熊本藩の詮議を受けます。春嶽は穏便な処分を願いますが、熊本藩ではこれを拒み、小楠は士分や家禄をはく奪された上、沼山津の四時軒で蛰居することになりました。

蛰居中の小楠の暮らし向きは、福井藩がその状況を知って生活費の援助（春嶽は100両の大金を送ったといいますが）を行うほど厳しかったようですが、小楠の自分も学び人を教えようとする熱意は衰えることなく、門人のほか農民などに対して、講義を行いました。さらに、国の政治の成り行きには常に気を配っており、小楠の長女みやは、母から「お父様はどんな時でも天下国家のことを忘れなかつたよ」と度々聞かされたといえます。諸藩有志の来訪や意見を問う密書も少なくなく、坂本龍馬が勝海舟の指示で数度にわたり沼山津を訪れた話は有名です（勝は「天下で恐ろしいものを二人みだ。それは小楠と西郷だ」と評しています）。蛰居の身にあっても、論策家としての彼の名は全国諸藩に響いていたのです。

小楠は、蛰居中、来訪した井上

毅（後の文部大臣）に対して「いかに多くの知識を得ても、活用しなければ意味がない」と語ったといいます。理由は違いますが、由利も、文久3（1863）年から蛰居となりました。ともに苦しいときを過ごし、国の行く末を思った師弟。王政復古後の維新政権の下で、徴士参与として、二人は政治の表舞台に再び登場することとなります。

関連史料・ゆかりの地

四時軒



熊本市にある横井小楠の旧居、四時軒。四季の眺めが素晴らしいことから、その名が付けました。坂本龍馬や由利公正のほか諸藩の有志らが訪れ政局を語ったといわれています。熊本地震で被害を受けた四時軒、復旧が望めます。

【住所】熊本市東区沼山津 1-25-91
(熊本交通センターより熊本市バス「秋津小楠記念館前」下車徒歩5分)

参考資料等

三上一夫・舟澤茂樹編『松平春嶽のすべて』新人物往來社
菅秀隆『横井小楠—その業績と生涯—』くまもと市政だより